

狂クキヤウ

溟メイ

集シツ

功
散
人
漢
詩
集

2015. 8. 15
2018. 2. 5

改訂 一版

目次

1	湯島聖堂ニ游ブ	1
2	MOONSTONE——開高健ノ珠玉ニ寄ス	4
3	KONTRAPUNKT——あるは、海を感じる時	7
4	重陽節・春の夢	10
5	秋思	12
6	七夕節	14
7	三余	16
8	RICERCAR	18
9	水邊ノ苑ニ樂音ヲ聽ク	20
10	接待——あるいは、猫と話のできるS&Kとストリップに行く	22
11	荷風散人ノ日乗ニ寄ス	30
12	川崎柳巷ノ游子幻影	32

13 永井荷風 『濹東綺譚』——勘違い恋愛小説

14 千鳥ヶ淵観桜、靖國参拝

42 34

1 湯島聖堂ニ遊ぶ

今日、東京都文京区の湯島で、某省庁のマイナンバーシステムのデザインレビューがあり、久しぶりにJR中央線・御茶ノ水駅に降り立った。うちの会社の本社ビルは、以前はここ御茶ノ水の聖橋のたもとにそそり立っていたのだが、リーマンショック後の不況の煽りで、数千億の赤字を出し、その清算の一環として売却されてしまった。その後取り壊されていまでは新しい高層ビルが建っていた。でも、そこからわが社は文字通りV字回復を果たした。俺たちは、結果的に中国系企業に買い叩かれているシャープとは、——経営トップの哀れな自己保身ゆえに最悪の道筋を辿っている関西企業とは、——違うのだ。と、ま、俺の実力とは何の関係もないことをつい考えてしまった。

二十分ほど時間的余裕をもって事務所を出たこともあり、聖橋を渡ったところで、湯島聖堂をちよつと散歩することに。湯島聖堂は徳川五代綱吉の家塾に始まり、その後、名高い昌平坂学問所としてわが国の高等教育の魁となった施設である。付近には東京大学、東京医科歯科大学があり、カルチェラタンの雰囲気横溢した一郭にある歴史的建造物に相応しい。来歴はかくのごとくあくまで学問所であったにもかかわらず、いまでは学問成就の願かけをなすお社のような信仰を集めていて、訪れる人々によってたくさんの絵馬が奉納されている。

敷地内には大紫羅欄花^{おおあらせいとう}——中国名は諸葛菜——の薄紫の群生がいたるところに広がり、晩春の午下がりの時が静かに流れていた。観光客がほとんどおらず、ちよつと東京の繁華喧噪の陥穽に入り込んだかのような、長閑な気分だった。

会議は弊社顧客省庁担当プロジェクトのプロジェクトルームで開催されたわけだが、それは、本郷通りに面した、築五十年くらいかと思しき古くて狭くて汚らしい雑居ビルにあった。コン

。コンピュータシステム開発というよりはむしろ、トイチの町金融業に向いたたたずまいだった。エレベーターは、三人も乗るとききちきちでお互い照れてしまうくらいに狭い、三菱の古色蒼然とした古いロゴの付いた年代物であった。よくもまあ、よりによってこんなところをみつけたもんだとヘンに感心してしまった。湯島、本郷というと、新しい建築物の裏手に大正風情のいわゆる看板建築も数多く残っていて、これはモダン都市・東京の面白い特色でもある。

会議のあと、帰社する前に、蔵前橋通り沿いのおりがみ会館、駿河台にあるニコライ堂に寄り道した。帰宅して万歩計を確かめたら、10,780歩、歩行距離約7.8kmであった。けっこう歩いたものである。

游湯島聖堂

Apr. 20, 2016.

湯島聖堂ニ游ブ

暮春^{ムスフ} 晡^フ下^カ 聖堂^{セイダウ} 陰^{カゲ}

暮春^{ボシユン}ノ 晡^ホ下^カ 聖堂^{セイダウ}ノ 陰^{カゲ}

諸葛^{シヨカク} 紫叢^{シソウ} 周^{アマネ} 暢^{チヤウ} 林^{リン}

諸葛^{シヨカク}ノ 紫叢^{シソウ} 周^{アマネ}ク 林^{リン}ニ 暢^{チヤウ}ブ

老^{ライ} 學^{ガク} 難^ナ 成^{セイ} 猶^{ユウ} 惑^{マド} 命^{メイ}

老^{ライ}イテ 學^{ガク}成^{セイ}リ 難^ナク 猶^{ユウ}ホ 命^{メイ}ニ 惑^{マド}フ

有^ユ 閑^{カン} 良^{リョウ} 日^{ジツ} 是^{コト} 惺^{シヤウ} 心^{シン}

有^ユレバ 閑^{カン}有^ユレバ 良^{リョウ}日^{ジツ} 是^{コト}レ 惺^{シヤウ}ナル心^{シン}

暮春の夕方 聖堂の日陰

諸葛の紫の叢が 暢び暢びと林に広がっている

老いて 学は成りがたく いまだに天命に惑う

でも 閑有れば よき日 それは 澄んで静かな心

2 MOONSTONE——開高健ノ珠玉ニ寄ス

四月十四日、清明末候、虹始見。にじはじめあらはる桜はほぼ散つてしまった。花冷えといふのか、冷気の快い、澄んだ上弦の夜。JavaServer Webアプリケーションのデバッグにも疲れた。俺はジンにレモンを絞り入れ、古びたティヴァンで、地べたに乱雑に重ね置いた本の塊から一冊の文庫本を手にとった。

開高健『珠玉』、文春文庫、1993年刊。これは作家の遺作小説である。アクアマリン、ガーネット、ムーン・ストーンの輝きを巡って、人生の記憶を結晶させた、一種独特の文学的変奏曲集ともいえる作品である。まさに珠玉の名品である。開高が亡くなつてそのシヨックの冷めやらぬころにこれを読み、日本文学の一時代の終焉を感じたものである。アクアマリンの底のない青い煌めきに己の半生の喪失感を投影して号泣する登場人物・高田先生のように、俺も『珠玉』を読んだ、開高健という現代日本を代表する作家の魂の彷徨に思いを馳せ、涙を禁じ得なかった。

飛ばし飛ばしページを繰るうち、ムーン・ストーンの白濁の妖しい光輝に情欲を掻立てられる。携帯電話からいつもの番号に発信して、Mを超越すよう依頼する。

事務室の開け放した西側の窓から、ちょうど四十五度の角度に弦月に鮮やかに見えた。事務機の白熱灯ひとつの薄暗い仕事部屋。俺の吐いた煙草の煙で月が霞んだかと思うと、いつのまにやら部屋に紛れ込んだ蛾が、紫煙の帯を掻き乱して、Macのモニタの端にびたりと止まった。春気が重くのしかかつて来た。音のない夜になった。

ふと気づくと、いつからか、髪の長い女が扉の傍に立っていた。「こんばんは。お待たせ」——俺と目があつてからはじめてMはそう言った。出かけるとき以外鍵をかけないのを知る彼女は、俺の仕事部屋兼寝室兼食堂に勝手に入つて来る。俺は近づいて、持っていたジンを立ったままの

女に一口飲ませ、女の唇を吸う。そして、乳房をつかむだろう。

寝台でMと交わる。上弦の月。青白い月光と一点のスタンド光とに照らされて、モニタにへばりつく蛾の鱗粉が、室内を漂って、ゆつくりと、ゆつくりと、拡散してゆくのが、俺の目にはつきりと見える。それが部屋を満たそうかというとき、女が腰を震わせた。そして俺は、高波を迎えるまさにその瞬間、ペニスを抜いて女の胸に精液を迸らせた。

荒い呼吸で大きく上下する乳房の、薄紅色をした乳首に寄り添って、白い艶やかな液体が月の光を集めている。月長石^{MOONSTONE}。それを指で掬い採りMの唇に擦り付ける。女の唇を、鼻孔を、耳を、
脛を舐めまわす。

MOONSTONE

Apr. 16, 2016.

開高健ノ珠玉ニ寄ス

清明花落上弦昭

清明 花落チテ 上弦 昭ナリ

蛾翅舞罷烟帶撩

蛾翅 舞ヒ罷レテ 烟帶 撩ル

長石乳輪適月曜

長石ノ 乳輪ハ 月ノ 曜ヲ 適メ

欲勝重夜倦勞潮

勝ヘント欲ス 重キ夜ノ 倦勞ノ 潮ニ

清明の時候 すでに花は散り 上弦の月がくつきりと出ていた

蛾の翅が飛び疲れて止まり 煙草の煙が乱れた

月長石の乳輪は 月の光をあつめている

重い夜 押し寄せる疲れの波を 持ち堪えようとした

3 KONTRAPUNKT——あるいは、海を感じる時

海浜の小さな廃工場に、俺はひとり暮らししている。Webサイトの制作を引き受けている。舞い込む仕事はアダルトサイトばかりだ。業者のコンセプトを勘案してページをデザインし、業者の用意したエロビデオや写真素材から適当なカットを選び、コンテンツ用画像をPhotoshopとIllustratorで加工し、文言を脚色し、サーバーレットプログラムを書き、遙か遠く米国にあるサーバに接続してアプリケーションをdeployし、サイトを試験し、公開する。全部ひとりで行う。朝方、ここ二週間係った仕事を終えたところだ。

開け放した大きな窓から入り込む、爽やかな秋の午前空の空気と潮騒が、百平米ほどもあるだけだ。広い、薄汚い、かつての工場事務室、いまは俺の仕事場兼寝室兼食堂を満たしている。窓の横には異様に大きな事務机。この工場が倒産に追い込まれるにあたり、社長はこの机で頭を抱え、一家心中を思い描いたかも知れない。机の上には、俺の万能の仕事道具であるMacintosh。古道具屋から買ったいた薄汚い皮製ディヴァン。缶ビールしか入っていないHITACHI製の冷蔵庫。ONKYO製の高級オーディオセット。服やら、食器やら、本やら、レコードやらを雑然と押し込んだ、工場作り付けのキャビネット。あとは、建て替えるというので近所の病院から貰い受けた、何年ものかわからない、そして、この上で何人の人間が死んだのかもわからない、おそろしく使い古した、やはり薄汚い寝台。ただそれだけ。

その汚らしい寝台に、いま、全裸の女が寝そべっている。朝から電話で遭わせた、今日始めて顔を見る女である。ひと仕事終えた彼女に、俺は——やはり素っ裸のまま——熱いシヨコラをいれてやる。そして、ピアノを弾くというこの女のために、JOHANN SEBASTIAN BACHのDas Wohltemperierte Klavier、SVJATOSLAV RICHTERのMEMOIJIN盤に針を落とす。朝刊にさっと目を通しながら、「あとで領収書書いてくれるかな」と女に言う。「あとね…」と続けて、ひ

とつ猥褻な要求をする。そして、耳を澄ます。

海を感じる時。海潮音。BACHの対位法。KONTRAPUNKT。ピアノのこの上なく優しい、柔らかい響き。女

のくぐもった吐息。新聞の紙面から遠く聞こえて来る、安保法案反対デモやら、シリア空爆やら、中国経済失速やら、幼児虐待殺害やら、一億総活躍社会スローガンやらの、現実的非現実、あるいは、非現実的現実の喧噪。そして、俺自身の腐った半生の記憶から、人の声——たいていは暗く悲しい声——の断片。これらすべてが、譬えようのなく青く澄み切った美しい秋の空と海の現実のなかで、同時に鳴りとよんでいる。

——映画『海を感じる時』を観し。Oct. 23, 2015.

KONTRAPUNKT

Oct. 23, 2015.

或ヒハ、海ヲ感ズル時

聽^ク窗^ニ秋浦^ノ海潮音

窗^ニ聽^ク秋浦^ノ海潮音

美姣^ノ寬^レ房^ニ奏^ス己^ノ琴^ヲ

美姣^ノ房^ニ寬^ク己^ノ琴^ヲ奏^ス

世縁^ノ脛^ニ撩^テ乖^ク我^ガ計^ニ

世縁^ノ脛^ニシテ撩^テ我^ガ計^ニ乖^ク

律鳴^ノ對法^ノ歎聲^ノ侵^ス

律鳴^ノ對法^ノ歎聲^ノ侵^ス

窓から来る秋の浦の海潮音に 耳をそばだてる
女は部屋でくつろぎ そのピアノを奏でている

世事は あまりに多くのことが茫漠と入り乱れて 我が思うようにはならない
対位法の旋律 嘆声がそれを侵す

4 重陽節・春の夢

九月九日重陽節。大雨で川崎市にも土砂災害避難勧告が出た。ズブ濡れになって帰宅し、熱い珈琲を淹れ、宮本輝の『春の夢』（昭和五十九年作品）を読む。

主人公・井領哲之は、やくざの借金取りから身を隠すために、大阪と奈良の県境に近い住道のアパートに引越した。初日まだ電気が通らぬ闇のなかで柱に釘を打ち付けたところ、恐ろしい偶然で一匹の蜥蜴の腹を釘で貫いていた。まだ生きている。薄気味悪く放置するもなかなか死なない。いつそ殺してしまおうかとも思うそのうちに、水をやり、餌をやり、キンと名付けて、哲之は密かにこの不自由な蜥蜴と暮らすようになる。

心臓病に苦しむバイト先の先輩や、死んだ親父の借金を背負わされて怯えながら生きる母と己の姿をみつめるうち、哲之は、人の人生とは釘で貫かれた不自由なまま生と死の間で翻弄されるこの蜥蜴にほかならないと思うに至る。次の春の記念の日——それはうらかな陽光のなかで恋人・陽子とはじめて交わった輝かしい日だ——に、キンの釘を抜こう——哲之はそう決心する。釘を抜くことでキンは死ぬかも知れない。自由の生を再び生きはじめるかも知れない。

重陽節讀宮本輝春夢

Sept. 9, 2015.

重陽節ニ宮本輝ノ春ノ夢ヲ讀ム

重陽ノ黑夜雨霏霏

重陽ノ黑夜 雨霏霏タリ

冒褥風聲剝內衣

褥ヲ冒ス 風聲ハ 內衣ヲ剝グ

蜥蜴穿釘振舌尾

蜥蜴 釘ニ穿セラレテ 舌尾ヲ振ル

可期闇闇春夢機

闇闇ト 春夢ノ機ヲ 期スルベシ

重陽節の闇夜 雨が乱れ降っている

褥を冒す風の音は 下着を剥いでゆく

蜥蜴は釘に貫かれ 舌と尾を振る

暗いところでひそかに 春の夢のときを待っているのだ

5 秋思

雲一つない、気持ちのよい秋晴れだった。黄昏時、虎ノ門・特許庁の前を歩いていると、どこからか金木犀のほのかな匂いが漂って来た。ふとみると、睫毛を伏せた女が僕の目の前を通り過る。

Ты проходила без улыбки,
Опустившая ресницы,
И во мраке над собором
Золотится купола.

おまえは微笑むこともなく
通り過ぎようとする まつげを伏せ
そして伽藍の上の暗闇に
円蓋が金色に光る

ロシアの象徴派詩人アレクサンドル・ブロークの、帝政末期のころの詩。学生時代に読んだもののなかで記憶に留めている、僕の好きなパッセージである。とはいえ、僕の目の前には、女はすでに去ってしまい——もとより、現実に僕の目の前を通り過ぎたのかも定かではないのだが——、庁舎が秋の茜色の西日に侵されているばかりだった。

もう「運命の女」なんて流行らない。黒衣聖母のような、かつては微笑みを投げかけてくれたのかも知れない、煙るような睫毛をした哀しくも美しい女は、どこにもいない。

秋思

К Александру Блоку. Sept. 29, 2014.

秋思——ブローク Александр Блок ニ寄ス

霽秋薄暮桂香微

霽秋ノ薄暮 桂香 微ナリ

蝙蝠翻虚混暗幃

蝙蝠 虚ニ翻リ 暗幃ニ混ズ

俯睫過嬢無泛咲

睫ヲ俯セテ 過グル 嬢ハ 咲ヲ泛カブルコトナク

晚鐘汪洩塔彤輝

晚鐘 汪ト洩イテ 塔ハ 彤ニ輝ク

雨の霽れた秋のたそがれ 金木屋が微かに香ってくる
蝙蝠が虚空に翻り 暗いとぼりと混ざり合う

女は 睫毛を伏せ 微笑みを浮かべることもなく 通り過ぎる
晚鐘が溢れるように長く音を曳いて 寺院の塔は 朱に輝く

6 七夕節

今年の七夕は雨こそ降らなかつたが、宵月も限りなく朧ろな夜だった。溽暑がぶり返した。西方では大雨の災害が出たとか。台風八号の警報も発せられ、とてもロマンティックな気分ではない。

牽牛と織姫も会えずじまいだったことだろう。天帝は織姫を哀れんで牽牛に添わせた。ところが、二人は、若い恋人たちの常として、どうもそればかりに励んだようである。織姫は機織りをさぼるようになり、怒った天帝は、年に一度、七月七日の夜にだけ二人が会うことを許した、とか。

七夕節

July 7, 2014.

七夕節

縹 縹 綯 繆 一 褥 中

縹ケンケン 縹ケンケン 綯チウビウ 繆トシテ 一ジヨク 褥ノ 中

香烟 薙 薙 曉 窗 風

香烟カウエンノ 薙カカ 薙カカ 曉ゲウサウ 窗ノ 風

天河 月 落 恨 霖 雨

天河 月 落チテ 恨ミ 霖リン 雨ウヲ 恨ミ

復 眺 山 間 花 濕 蒙

復マ 眺ム 山 間 花 濕シメ リテ 蒙クラ キヲ

慕い纏わりつき ひとつ褥のなか

気香ばしいシヨコヲ 明け方の窓の風

天の川 月も沈んで長い雨を恨む

山あい 花の潤んで暗い景色を いま再び眺める

7 三余

二月十四日、バレンタイン・デーは、先週に引き続き大雪となった。首都圏ではいくら雪が珍しいといっても、こう度重なると、電車は止まるし、転んでケガはするし、ウンザリした気分だった人も多いだろう。

雪が降り積もると、札幌で過ごした学生時代を懐かしく思い出す。部屋に籠って、胸を灼く熱いコーヒーを啜りながら、勉強したものである（ウソじゃない）。就職すると学生時代のようにはいかなくなるけれども、余暇に本を読み音楽を聴く。雪に埋もれたこの夜も、バッハのオルガン作品集をひたすら流して、中国唐代の伝奇集を再読する。

古来、中国には三余ということばがある。これは、一年の余・すなわち農事の暇な冬、日の余・すなわち労働を終えた夜、時の余・すなわち戸外活動ができない陰雨のとき、という三つの時間を示しており、読書すべき閑を見いだすときとされている。かくして、秋ではなくて、冬の夜の陰雨のころこそが藝術を楽しむに相応しい、というのが中国文人の伝統である。上田秋成はこのことばに基づいて「三余齋」（三余のオヤジ）と号したことがあった。そう、仕事を持つ社会人にとって、三余齋こそが風流なのである。

三餘讀唐代傳奇

小望月

Feb. 14, 2014.

三餘ニ唐代傳奇ヲ讀ム

月濡^レ雨霽^レ逆^ニ三餘^ヲ

月濡^ヌレ 雨霽^ハレテ 三餘^ヲ逆^ムヘ

夜半昏昏^{トシテ}對^ス故書^ニ

夜半^{ヤハ}ン 昏々^{コン}トシテ 故書^{フル}ニ對^{タイ}ス

窻視^ニ暈洗^{トシテ}膚皓^ク透^ク

窻ニ視^ミル 暈洗^{ウシ}トシテ 膚^{ハダ}ノ皓^{シロ}ク透^スクヲ

須臾^{ニシテ}轉^{ジテ}翳^ニ四圍^ハ虛^シ

須臾^{シユ}ニシテ 翳^{カゲ}ニ轉^テジテ 四圍^{シキ}ハ虚^{ムナ}シ

濡れた月が出て 雨が上がり 三余の閑を迎える
夜半うつらうつら 古えの書物を読む

ふと窓辺に 光の暈が茫と漂い 白い膚が透ける
たちまちそれは翳に転じて 私周りには何もない

8 RICERCAR

今日で年末年始休暇もおしまいである。

ヨハン・セバステイアン・バッハの *Musikalisches Opfer* のアナログレコードに針を落とす。

コーヒーを啜りながら、書斎の窓から午下がりの外気を浴びた。

カップの褐色の面に深い青空が揺れていた。

RICERCAR 新春詠

Jan. 5, 2014.

RICERCAR 新春ノ詠

映^{シテ}ニ 珈^ノ琲^ニ 面^ニ 彼^ノ 蒼^ク 濃^ク

珈^コ琲^オノ 面^エニ 映^エジテ 彼^ヒ 蒼^サ 濃^ウク

巴^ノ 赫^ク 滿^タ 房^ス 鍵^ヲ カ^ノ 農^モ

BACH 鍵^ノ CANON モテ 房^{バウ}ヲ 滿^ミ タス

時^ノ 世^ノ 流^レ 遷^ロ 人^ノ 意^ノ 亂^ル

時^ジ世^セ 流^ナレ 遷^ウロヒ 人^ジ意^シ 亂^ミル

樂^ノ 音^ノ 渦^ト 上^リ 夬^カ 雲^ク 峰^ヲ

樂^{ガク}音^{オン} 渦^{ウツ}ト 上^ノリテ 雲^{ウン}峰^{ホウ}ヲ 夬^クカツ

珈琲の褐色面の向こうに 青空が濃く映じ

バツハの鍵盤 カノンが部屋を満たす

時流れ 世変わり 人心は乱れ行く

楽音は渦のように昇り 雲の峰を分けて行く

9 水邊ノ苑ニ樂音ヲ聽ク

アントン・ウェーベルンが室内オーケストラのために編曲したバッハのRICERCARのCDを再生しながら、秘籍・江戸文学選巻六『医心方・房内』を読む。これは平安時代に編纂された房中術の書である。

ふと、玄溟に溺れる心地がし、漢詩を捻る。題して「水邊ノ苑ニ樂音ヲ聽ク」。我ながら何を言っているのかさっぱりわからない。噫。

水邊苑聽樂音

June 1, 2013.

水邊ノ苑ニ樂音ヲ聽ク

瞪ニ罌栗苑ヲ啜リ清泉

罌栗苑ヲ瞪メ清泉ヲ啜リ

聽ニ白面嬢ノ琴與絃

白面ノ嬢ノ琴ト絃ヲ聽ク

虚空蝶ハ翻リ唆ニ翡翠

虚空ニ蝶ハ翻リ翡翠ヲ唆ス

如將沈死洞中淵

將ニ洞中ノ淵ニ沈ミ死セントスルガ如シ

罌栗の花苑を見つめ 清らかな泉を啜り

白面の女人の弾く 琴絃に聴き入る

蝶は虚空を舞い 翡翠を誘う

あたかも 暗い洞の淵に沈められて 死ぬ思いがする

10 接待——あるいは、猫と話のできるSくんとストリップに行く

蒸留器レトルトの甘い薔薇の蒸気

熱せられた葡萄マスカットから滴る甘い液

太古いにしえの東方の地に産せる万能の香油ギリアド

さこそわが恋人の乳房に宿る汗の露

わが恋人の白肌うなじの項うなじに光るのは

汗ならず 真珠の首飾り

——ジョン・ダン『比喩』

勤務先部署が地方自治体向け戸籍管理ソフトウェアパッケージの新製品をリリースする運びとなり、今日、名古屋の販売会社担当SE（システムエンジニア）を対象に製品説明会を開いた。会に引き続き、いつものように懇親会。事業部ビルにあるラウンジで幹部が挨拶に顔を出すお決まりの立食パーティーだ。お開きの直前、生まれも育ちも名古屋の三十五歳のSE・Sくんを二次会に誘った。お次は、私がある時期に接待でよく使っていた、新宿歌舞伎町のクラブY。Sくんはその店のホステス・まどかちゃんが好きなのだ。「行きましよう」——「ええ、行きましよう」。五年ぶりである。

昔、わが国も景気が右肩上がり、わが商売では一台時価五十億ほどする高価な大型汎用機が飛ぶように売れた絶好調の時代があった。公務員倫理法などというシケた法律もなく、接待も開放的であった。私は営業として銀座、新宿、浅草、錦糸町のいかがわしいクラブで連夜のお客様を饗応した。浴びるほど吞ませ、女を抱かせた。湯水のように金を使った。数十億の受

注案件がぶら下がっていることを考えれば、それでも安いものだったのだ。錦糸町では、共産主義国家が崩壊して間もない混乱のロシアやハンガリーから出稼ぎに来た可哀想な(?)女の子に福沢諭吉を何枚か握らせ、お客様の言うことを何でもしてさしあげるように取りはからったこともある。こういう接待を恥ずべき営業手段と世の人は言うかも知れない。イエス。そう認めながらも私は喜んでやっていた。世の中には金ではどうにもならぬことがある。一方で、金を払えば許されることは、何をやってもよい。恥じることはない。

時代は変わった。日本経済はそれから間もなく急激に失速した。儲けているのは投資家とそのディーラーだけという理解に苦しむ経済構造と化したように見えた。金の切れ目が縁の切れ目を地で行くような世情になった。接待も相手が公務員となると厳しい制限が設けられ、事実上、オープンな立食の会合くらいでしか顧客と親交を深める手だてがなくなった。もうピンク色のギトギトした暗所にお連れすることはない。法律には従わなければならない。

でも、接待相手が関連企業の販売会社員となると、グループ企業のウチワということもあり、ホステスが横に座るクラブに連れて行くくらいはまだできる。もちろん、不況風が吹き荒れるこのご時世、領収書の額面として理由の立つ数万円くらいの「お食事」接待が予算の限界で(しかも、店員を説得して、許容額で領収書を分割させることすらある——経理処理上、これは御法度なのだ)。何故なら、領収書の分割は額面を低くすることになり、非課税限度額を下回ると脱税行為となるからだ)、女色の匂いのするおもてなしはそれに準ずる範囲内ということになる。つまり、クラブに連れて行きホステスにお触りをさせるのが関の山で、昔のように「お持ち帰り」をさせ、泡姫に嵌めさせる余裕なんてありはしない。ま、Sくんは中部地方で弊社システム品を年に何億も売りまくってくれるやり手であり、少し度を超したもてなしをしたって構わない、と私は考えていた。おまけに、Sくんは私の数少ない友人のひとりでもある。

Sくんは社内外を問わず相手に対して常に礼儀正しく誠実な応対をする人物である。約束は必ず守る。決して自己保身のための嘘を吐かない——もちろん商売のために私も彼も、ウソにならない範囲で製品の欠点を秘匿し顧客をたんと籠絡して来たのだが。彼は学生のころ、名古屋の一流大学で応用物理を専攻しながら、どういいうわけか英文学の教授にも私淑し、その指導のもとにジョン・ダン詩集原典を愛読したとのことだった。コンピュータ・システム商売の周縁で精神の同志を見出せなかった文学好きの私は、はじめて呑んだ席でこのエピソードを耳にし、すぐにSくんと意気投合した。私より一回り以上の若年であるにもかかわらず、SくんはHP—UXオペレーティングシステム——米国ヒューレット・パッカード社のブランド名——と弊社の製品について、開発側にいる私よりも広く深い知識を身に付けている。私の担当製品の問題点を理路整然と指摘して改善点を提案するかと思うと、同じ口調で英国バロック期詩人の綺想と聖なる淫蕩に言及する。バッハが好きだという音楽の趣味でもウマが合った。こんな精神的同志が同じグループ会社にいるということ自体に私は喜びを感じた。

しかし、私がSくんに強く惹かれるのはその人柄と趣味の点だけではない。彼は猫と話ができるのである。

否、話ができる、というのは正確ではない。ニャーニャー、あるいは名古屋流にミャーミャーやり合うのではなく、互いに見つめ合っていると猫が何を考えているのかが解せられるというべきである。そして、己の意思を猫に伝達できるというべきである。

五年前。クラブYで、笑顔の愛くるしい、鼻筋の通つて、切れ長の、しかしどこか淋しげなところのある目をした、美しいまどかちゃんと、三人で、楽しく、イヤらしく呑んだあと、終電の気になるころ合い。コマ劇場——いまはもうなくなってしまうた——辺りを二人で歩いていると、煙草の自販機のそばでじつと香箱を作るキジトラの野良猫がいた。Sくんはそれを認めあつと叫

ぶや、慌てて近寄つて猫の鼻前で、地べたに座り込んだ。猫と目で会話しているらしかった。しばらくしてSくんが「わかりました。必ずお伝えします。約束します」と神妙につぶやくと、猫はそそくさと姿を消した。「どうしたの?」と私が言うと、「新宿ニューアートのK・Kという踊り子宛てに、とても大事な伝言を預かりました」とSくん。「なるほど」。私は少し考えてから納得した。要するにストリップショーが観たいということだろうと。このスケベ。持つて回つたおねだりをするものだ。ま、私もこういう捻りは嫌いではない。「じゃあ、これから行きましょう」。

新宿ニューアートは歌舞伎町ゴールデン街にある、浅草ロック座系列の老舗のストリップ劇場である。劇場というよりは、そう、小屋というに相応しく、客が三、四十人も入れば満杯になつてしまう。私はSくん以外にも何度かお客様をここに連れて来たことがあつた。ヌードショーの半券を接待領収書扱いで経理部に提出するのはさすがに今も昔も不可能だが、これくらいの身銭を切るのは仕方がない。風営法の制限時間・深夜零時に近いこの刻限、公演終了間際のストリップ小屋に入るのは、正直、躊躇われた。小屋の前に掲げられた香盤——すなわち、その日のストリップ公演に出演する踊り子の一覧——に、K・Kの名前と唇も婀娜なる写真があつた。「確かに。K・K。いい女ですね。どんなおまんこしてるんでしょうか。行きましょう」。半地下への階段を降り、私は二人分の料金を支払つた。

箱に入ると舞台では、いましがた演技の終わったばかりの踊り子がちょうど大股開きで客にポラロイド写真を撮らせているところだつた。明るくなつた箱で、むき出しの音響装置や照明機器とともに、「盗撮禁止。罰金五十万円」だとか、「自慰厳禁。罰金百万円」だとかの、相変わらずの、白ける、汚らしい貼紙が目飛び込んできて、哀しくなつた。世の景観とは、一パーセントにも満たないごく少数の愚かな放埒者の存在によつて、決定的に損なわれるものである。

ほどなく照明が落ちて、音楽が轟きだした。折よくK嬢の演技がはじまつた。菖蒲柄も艶なる

小袖姿。着物にあしらわれた須磨の源氏香文様が心憎かった。ロックの激しいリズムに合わせて手際よく帯を、襲を解いて行く踊りは見事だった。Kのダンスは、ハダカで抱き合うだけではつまらない、セックスには、何かしら、フィクショナルな愛戯が必要だ、ということを変更してわからせてくれた。鍛えられたプロのダンサーだ。ベッド——メインの舞台から伸びる花道の先にある回転式円形小舞台——でスキヤンティーを脱いで足首に結んで全裸になるあたりには、香油を噴いたように汗が上体に煌めき、緩やかな動きにかなりの力を要するらしく、女の大腿、二の腕、指先が、小きざみに震えていた。

「ヤスダさん、僕は猫だけじゃなくおべんちよとも話ができるんです。あ、ヤスダさんは京都のご出身でしたね。おべんちよとおめこのことです」——Sくんはスポットライトを浴びたKの青白い裸体から目を離さないようにしながら、私の耳元でそう呟いた。「は？……あ、そうですね、そうですね、そうですね。僕もアレは大好きですから。小沢昭一的ころってやつですね」。「でも、毛を剃ったおべんちよとは何故か話を通じない。どうしてなのでしょう。僕は陰毛の綺麗な女性のおべんちよとこそ通じ合えるのです。ロールシャッハテストの図案は皆それに見えて話しかけてしまうくらいなのです」。

私にはSくんが、何か、こう、川の対岸に行ってしまった者のように見えた……。とはいえ、彼はおべんちよ、おめこ、要するに女性器を巡ってすら、UNIXオペレーティングシステムのスレッドメカニズムや、先の国会で可決された法案のビジネス環境への影響についてなど、仕事の話をするときとまったく同じ落ち着いた口調で、含み笑いもなく、真面目に、ごく自然に、フラットに、語る。そして、弊社ソフトウェア製品への顧客要望を説明されてでもいるかのように、こちらにも何の違和感もない。

「あ、ちよつとすみません」と彼は、そつと席を外し、最後尾席でうつらうつら居眠りしてい

る客にそつと近づいてゲンコツをひとつ食らわせて戻つて来た。「Kさんの綺麗なおべんちよが私を覗かないで寝てるヤツがいる」つて訴えるものですから」。当の客は、突然の頭部の衝撃に何が起こったのか当惑しながらも、改めておべんちよに関心を集中させたようだった。Sくんは腐乱した蘭の花弁のようなKの女陰を静かに見つめていた。

Kの演技が終わった。満足した。「Sくん、ポラ（ポラロイド写真を撮らせてもらいに）行きましょう」——「そうですね、伝言を伝えなくてはなりません」。私たちの順番が来た。野口英世を二枚K嬢に握らせる私をよそに、Sくんは彼女の耳元で何かを囁きはじめた。彼女が不審の振舞に迷惑がるそぶりを見せたので、私はちよつと危険な臭いを感じSくんを制しようとその腕を引き寄せた瞬間、Kの大きな目から涙がぼろぼろ零れ出した。「どうして、お客さん、知ってるの？ え、そうなの、ほんと？ 知らせてくれてありがとう……」。Kの表情には、何か、生まれてはじめて泣ける映画か絵画に出逢つたかのような、晴れやかな感動が現れていた。「その方からの伝言をお伝えしたまでです」とSくん。いったい何が起こっているのか。

それからひと呼吸おいて、SくんはKに、深紅のハイヒールを着けた脚を左右に大きく広げて紅色のおべんちよを指で開かせ、できる限り大きく写るよう近づいてカメラのシャッターを切つた。「おべんちよ、おべんちよ、うっれしいな」と楽しそうに唄を唄いながら。「お弁当、お弁当、うれしいな」じゃないの？ 一枚目のポラロイドフィルムが思い切りゆつくりと迫り上げられる。二枚目。ロールシャッハテスト。「あんまり近づくとピンボケしちゃうよ」とKは涼しく笑った。

「猫の伝言つて何だったの？」——Kのオープンションショーが終わつたところでストリップ小屋を出ると、激しい好奇心を隠せず私はSくんに訊いた。「あの人——猫のことらしい——と約束したんです。内容をKさん以外に漏らしてはいけません。いくらヤスダさんが信頼できる方で

も。ただ、ひとつだけお教えします。とっても幸せな内容でした。あの人はKさんの思い出のなかでとっても大事な方なんだそうです」。

あれから五年。今夜も歌舞伎町クラブYに、そして新宿ニューアートに、Sくんを連れて行つた。彼が製品説明会のために久々に上京すると聞いたとき、そうすることを私はここに決めていたのである。「おべんちよ、おべんちよ、うつれしいな」がまた聞けた。しかし、まどかちゃんにも、K嬢にも、そしてあのキジトラ猫にも逢えなかつた。五年の間に皆、もう私の知らないところに去ってしまった。タクシーにSくんを乗せる間際、歌舞伎町のネオンの向こうで、一瞬間、冷えたレトルトのようなKの乳房に涙が滴つた。やっぱり訊いちゃいけないと自分に言い聞かせた。

春宵遇顧客看上弦月

Mar. 19, 2013.

春宵、顧客ヲ遇シ、上弦ノ月ヲ看ル

氛^チ満^ニ春^ニ庭^ニ細^{トシテ}膩^フ潤

氛^フ 春^{シユンテイ}庭^ニ満^ミチ 細^{サイヂ}膩^チトシテ潤^{ウルホ}フ

柳^ス花^ス攀^ス折^ス迎^ス官^ス人^ス

柳^{リウクワ}花^ハ攀^{ハンセツ}折^{クワンジン} 官^{ゲイ}人^スヲ迎^ス

遺^シ巫^ノ山^ヲ幻^リ獨^リ徬^フ巷^ヲ

巫^{フザン}山^{マボロシノ}ノ幻^ノヲ遺^シ 獨^{ヒト}リ巷^{チマツ}ヲ徬^{サマヨ}フ

弦^ニ月^ニ中^ニ天^ニ睚^{トシテ}皓^ニ暝^ル

弦^{ゲンゲツ}月^{チユウテン} 中^ニ天^ニシテ 睚^{ニラ}ミ皓^{コフ}トシテ暝^{イカ}ル

氛気は春の庭を満たし きめこまやかな湿りを帯びる
攀柳 折花 大切な顧客をもてなす

巫山の幻を後にして ただ一人 巷を彷徨った
弦月は天の真ん中で 白く怒り睨みつけていた

11 荷風散人ノ日乗二寄ス

こここのところ、通勤電車に揺られながら、永井荷風の日記『斷腸亭日乗』を読んでいる。

「歸途新大橋を渡り電車にて小名木川に至り、砂町埋立地を歩む、四顧曠茫たり、中川の岸まで歩まむとせしが、城東電車線路を跨る頃は早く暮れ、埋立地は行けども猶盡きず、道行く人の影も絶えたり、〔……〕遠く曠野のはづれに洲崎遊郭とおぼしき燈火を目あてに、溝渠に沿ひたる道を辿り、漸くにして市内電車の線路に出でたり」（『斷腸亭日乗』昭和六年十一月廿七日、『荷風全集』卷二十一、岩波書店、昭和四十七年）。

今夕、出張先の桜木町からの帰り、横須賀線の車窓から川崎陋巷方面の街灯りを遠望していると、ふと、『日乗』のこの記述は荷風の心象風景だったのではないかと思に至った。四顧曠茫。沈滞した時代にあつて、荷風の眼には、周りの存在は何もかも曠野に等しく映じ、一方で衰えを感じはじめた身は、尚も妓楼の燈火に惹かれ行くばかり、ということではないか。

寄荷風散人日乗

Feb. 22, 2013.

カフのサウジン ニテジヨウ
荷風散人ノ日乗ニ寄ス

晏眠 午睡 夕陰 醒ム

アンミン ゴスイ セキイン
晏眠 午睡 夕陰ニ醒ム

迷ヒ 倦ミ 白箋 櫻樹 暝シ

ハクセン マヨ ウウ アウジュ
白箋ニ迷ヒ倦ミ 櫻樹ハ暝シ

四顧 曠茫 填海 地

シ コクワウバウ テンカイ
四顧 曠茫タリ 填海ノ地

喘ギ 溝渠 徑ニ 紅燈ヲ 矚ル

コウキョウ ケイ アス コウトウ
溝渠ノ徑ニ喘ギ 紅燈ヲ矚ル

遅く起床し また午睡を貪り 夕方になつて覚醒する日々
真つ白な原稿用紙を前に 迷い 倦み 暗い庭の桜樹に目をやる
瀬東海浜の埋立地は 四方果てしなく 荒涼としていた
溝渠沿道で息を切らす 妓楼の燈火を遠くに眺めた

12 川崎柳巷ノ游子幻影

早めに仕事を上がった。今日、金曜日午前、開発工程の遅れに関する、プログラム開発担当部署との不愉快極まりない会議で、気分は最悪。「テメエ、お客にどう説明すりゃいいんだよ！」——でもって鬱な私は、仕事が一区切りした午後、事務所のある霞ヶ関から地元・川崎に向った。この炎天下に、身をじりじり焼いて、悪意を汗とともに流し去ってしまいたくなり、旧東海道に沿って散歩することにしたのである。まずは頭を冷やすこと！

ここ数日の寝不足と、会議の怒りと、お彼岸の近いこのクソ暑さでムカムカしていた。カンカン照りのなか、川崎駅から大きく迂回するように府中街道まで出て、それを川崎競馬場方面に進み、本町交差点から狭い旧東海道に入った。堀之内から南町まで、と決めた。ここは川崎の柳巷江戸時代から繁華な宿場街だった場所柄であろうか。たった二区画を挟んで一大ソーランド街が二つもある。

古風な珈琲専門店に立ち寄って一服。ピエール・ルイスの『アフロディテ』を読む。美しい娼婦・クリュシスと、理想美に囚われる彫刻家・デメトリオスとの悲劇的物語。古代アレクサンドリアの白昼の官能・ギリシア的清澄と、死臭の漂う東方的暗黒との、見事な頹廢的融合。

歩きながら、炎天下、クリュシスの輝かしい白昼の裸体を思い描く。そして、翻訳者解説について反芻する。夢のなかでクリュシスと交わったデメトリオスの快楽について、「夢は現実にまさる」などと説いている。思うに、これは、目の前にしかと存在する女性の肉体美を、理想美、絶対美などという持つて回った陳腐な概念を媒介せずには肯定できない、日本の大卒文学インテリ独特の観念的教条主義だ。『アフロディテ』の藝術の核心は、地上的女性美の無条件の賛美にある。解説者のこんな幼稚な抽象的解釈とは真逆のものである。

現実には夢にまさるのである。

川崎柳巷ノ游子幻影

Sept. 14, 2012.

P. Louÿs — Aphrodite に寄す

往^クニ 舊^ク 大^ヤ街^ヲ 焚^{タル} 灼^{タル} 風

舊^{キウタイガイ} 大^{ダイ}街^{ガイ}ヲ 往^ユク 焚^{フンシヤク} 灼^{タク}タル 風

焦^{ガス}ニ 希^シ 臘^ノ 幻^ヲニ 玉^ヲ 玲^ヲ 瓏^ヲ

希^{ギリシヤ} 臘^{マボロシ}ノ 幻^コヲ 焦^コガス 玉^{ギヨク} 玲^{レイ} 瓏^{ロウ}タリ

嫦^ス 齋^スニ 蘭^ノ 榮^ヲ 無^クニ 莖^ヲ 葉^ヲ

嫦^{チャウ}、蘭^{ランズイ} 榮^{モツラ}ヲ 齋^{ケイ}ス 莖^{エイ} 葉^{エフ}無^ク

變^{ジテ}ニ 輞^ノ 一^ニ 輪^ニ 還^ルニ 碧^ニ 空^ニ

輞^{リヤウ}ノ 一^{イチ} 輪^{リン}ニ 變^{ヘン}ジテ 碧^{ヘキクウ} 空^{カヘ}ニ 還^ル

旧街道をわたり往く熱風

古代ギリシヤの幻 玲瓏たる玉飾りを焦がす

月のような美女がくれた胡蝶蘭一花 茎も葉もない花蕊

ふと二輪車の片輪に変容したかと思うと 紺碧の空に還って行く

13 永井荷風 『瀧東綺譚』 —— 勘違い恋愛小説

思うに、文学の本質は作者の想像力・フィクションにある。作中の事物・状況がどれだけ風情に満ち、抒情的、浪漫的、刺激的、魅惑的に描かれていても、それは作者の想像力に依るものであり、描かれた事物の本性、現実、实在像とは異なるもの（「似ている、似ていない」ではなく、本質的に違うもの）と考えたほうがよい。

文学作品に描かれた事物の現実的な姿を己の経験と観察とに照らして解釈し、それと作品のなかでの取扱いとを見比べると、何が得られるか。このプロセスをきちんと踏みながら作品を楽しむのが「大人の読み」というものである。己の表象と作品世界とが近似していれば共感となり、不一致の場合でも新しい発見を与えてくれれば世界が広がり、生きることの豊かさがもたらされる。

『瀧東綺譚』は、「玉の井の私娼街を背景として人事に添えて夏から秋への季節の移りゆくさまを描写」(p. 110)した風俗小説にして、作者の意図として「玉の井という昭和の私娼窟を風物詩的に後世に伝え残そうとした」(p. 117)、「作中人物の生活や事件が展開する場所や背景を情味を以て克明に描き写した一種の随筆的小説」(p. 116)。引用はいずれも新潮文庫版『瀧東綺譚』の秋庭太郎による解説と評される。このように、秋庭の評の核心には、『瀧東綺譚』は「後世に伝え残す」べき現実（「生活」、「場所」、「背景」）を「克明に描き写した」リアリティと「情味」とを兼ね備えた小説である、という見方がある。おそらく本作品に対する評価の主流である。

僕もかつてはこの見方に準じて、『瀧東綺譚』は、季節の遷移の詩情と江戸戯作・漢詩の文学伝統の情趣とに彩られた、「わたくし」とお雪との間の、成就しなかった（情事はいくらでもなされたであろうが）はかない一夏の恋愛譚、山の手の金持ち老人と「其身を卑しいもの」(p. 72)とされる若く美しい娼婦との激しい落差にこそプロットの趣向のある恋愛譚と捉えて来た。そしていま現在も、文学的詩情と現代的遊女恋愛譚との融合にこそ作品の美点を認める。

しかしもう一方で、これだけで満足するのは、「大人の読み」といえるだろうか、現在の僕は疑いの目で見てしまう。「玉の井の私娼」たちの実際の生活、人となり、娼婦買春の遊びとしての習俗などなど、どこまでレアリアを調査した上で秋庭は「克明に描き写した」などと断言しているのか。まったくわからない。仮に娼婦というのが職業のひとつに過ぎないと突き放してみると、『澤東綺譚』を娼婦と客との恋愛譚として読むには、「わたくし」とお雪の「恋愛」関係にウソ臭さが否めないのである。

そういう疑問をもつて『澤東綺譚』を読むと、少し面白い作品構造が見えて来る。結論から言うと、この作品は「勘違い恋愛小説」の面白さがある。つまり「わたくし」とお雪とのやりとりは、江戸文学の雰囲気借りて上流のお忍び客と低級娼婦との異界流離潭風（己の上流出自を記しながらことさら身を窶して最下層に降りて来た「わたくし」は、玉の井を「ラビリント」と呼んでおり、どこか地獄を巡るダンテを気取っている）の恋愛情趣をまき散らしながら、じつは、互いの目に見えない心の状態がまったくすれ違っているという心理的諧謔を示しているのではないか。娼婦、すなわち男性に性的サービスを与えその対価に金銭を得るプロの個人事業者は、毎日毎日、来る日も来る日も、「仕事で」男性器を口なり女性器なりの解剖学的人体で受入れている。女性器は要するに商売道具であり日々のプロフェシヨナルな鍛錬により鋼鉄のように鍛えられている。とはいえ、己の女性器を使ったサービスを販売するというものを除けば、彼女はケーキを売る菓子屋の女店員とどこも変わるところがない。もちろん、娼婦は、それを「其身を卑しいもの」(p. 72)と書く荷風ばかりでなく、世の中一般から差別的に蔑みをもつて扱われている。しかし、客を遇する職業、仕事、生業という意味で、娼婦も、ケーキ屋女店員も等価である。すなわち、娼婦はケーキ売りと同様、客を恋愛対象として認識することはまずない、ということである。客がケーキを買ってくれ、リピートしてくれる限りにおいてケーキ売りがスマイルを振りまくのとま

さに同じく、娼婦は性行為に「恋愛」的演技（色目）を加えて客の満足度、リピート願望を掻立てる。その様子によって娼婦が自分に「気がある」と思うことの愚かしきは、ケーキ売りの店員のスマイルに「おれに惚れてんのか」と勘違いするのとまったく同じである。娼婦は性行為とその周辺の雰囲気・疑似恋愛を売り物にしているだけいっそう、その勘違いが起きやすい。

もちろんケーキ屋女性店員が客と恋に落ちる可能性はゼロではない。同様に、娼婦が客に本当の恋愛感情を覚える可能性だって当然ある。しかし、娼婦を「職業」として捉え、そのプロ意識の現実的理解（もちろん僕の理解）を念頭において、『澤東綺譚』のお雪の言動を観察すると、彼女が「わたくし」に対して恋愛感情を抱いてしまったという、甘美な小説的ストーリーよりもむしろ、性のプロフェショナルによる疑似恋愛のフェイクのしたたかさこそが読み取れるのである。つまり、『澤東綺譚』は「おれに惚れてんのか」式勘違いを巧みに描いた小説なのである。

「わたくし」がどうも勘違いしているようだと思われるのは、『澤東綺譚』のお雪の振舞いに、「わたくし」が特別ではない、数ある客の一人でしかないことを示してあまりある記述が散見されるからである。お雪の客には、ひと月の間家に居座った呉服屋のドラ息子話が出て来る（p. 39）。これは「わたくし」のような金持ちの馴染みがお雪にはごろごろいるということである。「あなた、おかみさんにしてくれない」（p. 5）という「わたくし」を怯えさせた決定的告白は、独身者と判明した年輩金持ちリピーターへの愛情フェイク表現の常套手段とも取れる。しかも、この台詞を発した直後にお雪は、馴染みの客が店口を叩くのを認めると、「アラ竹さん、お上んなさ」と言つて「わたくし」をほっぽり出して「馳け降りる」ように階段を急いで竹さんを出迎えるのである（p. 578）。こうして『澤東綺譚』は「わたくし」以外の客の誰もが「わたくし」のような応対を受けている可能性が見えるように書かれているのである。そもそも、初対面で「どこに出ているんだ」（p. 25）というように立ち入った過去を訊く「わたくし」のような客は、娼婦

にとつて馴れ馴れしいイヤミな客の第一属性である。それは「これで沢山だわねえ」(p. 26)というお雪の苛立った台詞によく現われている。お雪にとつて「わたくし」はいよいよ「金持ちのリピーター」としてしか映っていなかったのではないかと想像されるのである。

江戸戯作・花柳小説の伝統を背景とした情趣を横溢させることにより、このような散文的勘違いをはかない一夏の恋愛譚に劇的に反転させて見えさせるところこそが、この小説の諧謔である。別離の半年ないし一年後の「わたくし」とお雪の再会を想像するくだりで、「この偶然的邂逅をして更に感傷的ならしめようと思ったなら」(p. 81)云々と描写をためらい、ロツチの筆に言及することで茶化しているのは、その諧謔を強調している。実際なら、どれだけ馴染みにしていたとしても、客は客に過ぎず、娼家の外では単なる通行人と変わりはなく、疑似恋愛サービスを与える必要はないわけで、おそらく、上がった(素人になった)お雪は「わたくし」を認めても「知らんぷり」(あれはサービスなんだから勘違いしないで、もう私は娼婦ではないのだから纏わり付かないで、という意図を込めて)をしたに違いない——これは僕の実際の・散文的な想像である。そして、思うに、荷風もそう考えていたのではなからうか。

『濯東綺譚』を読んで、昔の娼婦は風情があつてよかつたとか、こんな美人で気のよい娼婦に出会つて同じような切ない恋愛がしたいとか、そんなふうに関傷的にノボセあがるとしたら、それはガキの読み方である。臆に指を突つ込まれてぐりぐりされ潮吹きをさせられてよがるアダルトビデオ女優を観て、「女はこれをされると悦ぶんだ」とガキのように勘違いするのとどこも変らない。それは男の勝手な欲望というものに依るフィクションでしかないのだ。それは、女のオーガズムの実態ではなく、観る側である男の独り善がりの趣味をこそ示しているのである。

新潮文庫版『濯東綺譚』の解説で、秋庭太郎は次のように書いている。

わたくしなる人物がお雪と別れる理由は、お雪が女房おかみさんにしてくれと云い出

したことからであって、女は人妻となれば嬾婦か悍婦になるからだと敬遠するのである。これはわたくし則荷風の女性観結婚観であり、女性不信の作者の性向が窺われるものの、お雪をいと惜しむ結末の余韻ある巧みな描写に陶醉して作者の女性観などを是非する余裕を与えない。

『濯東綺譚』新潮文庫、1951年、p. 118。

たしかに「女性観などを是非」するだけでは『濯東綺譚』の豊かさは抜け落ちてしまうだろう。それでも、おそらく荷風はそういう己の性情を作品で暗に、自嘲的に、からかいたかつたのだと僕は信ずる。だからこそ鋼鉄の女性器をもつプロフェシヨナルとの恋愛遊戯の反転的諧謔が意味をなすのである。小説的勘違い野郎を笑ってやる、つてなもんや。

考えてみれば、「おかみさんにしてくれない」と言われて敬遠してしまう「わたくし」の姿は、好きだけ恋人とセックスしておきながら、「結婚して」と彼女に迫られたトタンにドンビキしてしまう、覚悟のない無責任な若い男とじつに似ている。つまり、秋庭の指摘している荷風の「女性不信」は、無責任の持つて回った言訳でしかないように僕には思われる。「女は人妻となれば嬾婦か悍婦になる」——これは「真理」だろうか？ それは、そのように「わたくし」ないし荷風が思っているだけであって、ただただ彼が女性ときちんと向き合うことができない性格であるからこそ出て来る身勝手な偏見である、と考えたほうが穿っている。

荷風は正妻を一年で離縁し、次に迎え入れた娼妓上がりをやはり一年で追い出している。当たり前である。学校に通う弱年から、一人の生身の女性と真摯に向き合う前に、荷風は買春にハマっているのだ。性戯のプロ、しかも思いやりだとかをまったく示さなくとも金でラクに恋人気分を満喫できるプロ——そういうフィクシヨナルな女性に馴らされた若い男——しかも、江戸情緒あ

ふれる文学的フィルターを通してしか女性を眺められない男——が、普通の、あれこれ面倒を焼かなくては恨み言ばかり言う、手間のかかる、我慢を強いる、所帯染みた、性戯のへたな、性器の臭う、現実の、生身の女性に満足できるわけがないではないか。で、一年というわずかの間に飽きて女が厭わしくなってしまう。こうして女性観が崩れて行き、「女は人妻となれば嬾婦か悍婦になる」という単純極まりない考えに至るのは、容易に想像がつく。作家としては大いに尊敬する永井荷風が人間・男としては自己中心的な欠陥をもった人物であったと僕は思っている。女を嬾婦だの悍婦だの蔑む前に、己の男としての器量を疑ったほうがよい——僕の独り言。

Post Scriptum

お雪の部屋をはじめ訪れた際に「わたくし」が「おぶ代」（御祝儀）として五十銭を支払うくだりがある（p. 26）。昭和十年ころの相場として、米十キロが二元五十銭くらいだったというから、五十銭はいまならその二千〜三千倍の千円、千五百円くらいの価値である。現代の性風俗に照らしてサービス料（要するに本番の対価）がその二、三倍としても、五、六千円でお雪を買えたことになる。いまのヘルスより安い。

そんな格安の娼家で、「わたくし」は「じゃ、一時間と決めよう」（p. 28）などというケチな遊びをしている。一時間なんてショートコースもいところであって、娼婦からすれば「なによ、一発嵌めて終わりってこと？ そんなに私は安い女なわけ？」と思われても仕方ない。あれほどお雪の江戸前の美に瞠目している割りには、安く上げ過ぎではなからうか。一方で「わたくし」は古雑誌と長襦袢の古着に三円七十銭をはたいているのである（p. 14）。

こういうところからも、『濯東綺譚』の恋愛譚としてのウソ臭さを僕は嗅ぎ取ってしまうのである。誰か性風俗遊興観点で『濯東綺譚』のこうした経済学的意味論を説いてくれる——「情味」

に溺れるあまり玉の井のレアリアを「克明に描き写した」などと筆が滑ってしまう秋庭のような
感覚的論者ではない——実証的研究者はいないものだろうか。

再び Post Scriptum

上記で荷風の「人と成り」をかなり手厳しく書いてはいるが、僕にとって荷風は明治以降で一
際深く尊敬している作家のひとりなのである。悪く思う部分は彼の一面でしかなく、彼の文学的
業績はそれを埋め隠してしまうばかりに大きい。『澤東綺譚』は諧謔的な読みを許すくらい豊か
な意味の膨らみを備えた小説なのである。

僕だってお雪さんが大好きなんである。ただ、その「大好き」の依って来る魅力は、「社会の
最底辺にある娼婦でありながら、可憐な心を失わない」などという子供だましの感傷的女性像に
ではなく、たった独りの観客（買春客）を前にした密室の疑似恋愛劇の巧みな役者の姿にこそあ
る。二十四、五の女性がそのプロフェショナルな演技でもって、五十八歳の「わたくし」の生を
狂わせ、手玉にとっているのだ。思うに、『澤東綺譚』の諧謔的・反転構造を捉えないと、その現
実性ある魅力は失われてしまうのである。

寄荷風先生澤東綺譚

July 22, 2012.

荷風先生ノ澤東綺譚ニ寄ス

墨水來東雨沛然

ボクスイヒガシキ
墨水ノ東ニ來タリ 雨沛然タリ

夜光蒸鬱妓樓咽

ヤクワウ ジョウウツ
夜光 蒸鬱トシテ 妓樓咽ル

菖花插繖房門靠

シヤウクワ カサ
菖花 繖ニ插シテ 房門ニ靠ル

窓下聽靴霽月還

サウカ クツキ
窓下ニ靴ヲ聽ケバ 霽月還ル

墨田川の東に來た 雨がしとどに降っていた

夜の灯りが蒸し蒸しと鬱陶しい 妓楼は雨に咽っていた

菖蒲を傘に挿して 部屋の戸口に立てかけてある

窓の下で外の靴音に耳傾ける 霽れた月がいつかの姿で戻っている

14 千鳥ヶ淵観桜、靖國参拝

四月四日、土曜日、陰。花見がてら散歩をしようと、妻と二人で東京・九段に行く。先週の後半、三月二十六、七日あたりは天気もよく、桜も見ごろかと思われたが、その週末は仕事で花見の都合がつかず、今週にずれ込んだら天気は陰。花も風雨に乱れるかとしずこころない微妙な時機かも知れなかった。

鼠色の曇り空の下、うそ寒い日和に、千鳥ヶ淵の桜は盛りを過ぎて葉桜になり、そして散りはじめていた。田安門下の濠の水面をおびただしい落花が覆っていた。新古今を代表する女流歌人・宮内卿の歌を思い起こした。

花さそふひらの山風吹きにけり　こぎ行く舟の跡みゆるまで

舟の行跡に焦点をおくことで却って落花撩乱を印象づける歌で、宮内卿一流の「跡」の視覚的レトリックがある。散ることで恋人たちを彩る桜。

淵に沿って歩くうち、桜の樹の元に群生している白い花を指して妻が言う。「これシャガつていう花で、俳句によく出て来るのよね」と教えてくれた。シャガ、著莪の花。帰宅して調べたところ、アヤメの一種で、別名を胡蝶花とも。絢爛と溢れる桜の海のためと目立たずひっそりと咲いていたこの花の季は初夏である。

九段坂を上り、靖國神社を参拝する。大東亜戦争終戦七十年。本堂で拍手を打って、霊を呼び起こす。能楽堂の桜。靖國の桜は、散ることの美で霊を鎮めている。また花を咲かせることを教える落花でもある。

九段坂幻影

Jan. 22, 2012.

九段坂幻影

櫻雪 蕭然^{タリ}昇^ル九堙^ヲ

櫻雪^{アウセツ} 蕭然^{セウゼン}タリ 九堙^{キウコウ}ヲ昇^{ノボ}ル

氣清^ク雀嘯^リ薄霞^ヲ洗^{タリ}

氣清^{キキョウ}ク 雀嘯^{スズメサヘツ}リ 薄霞^{ハクカ} 洗^{クワウ}タリ

視^ル靈^ノ廢卒^ヲ幽^{カニ}跳^{ブレ}坂^ヲ

視^ミル 靈^{レイ}ノ廢卒^{ハイソツ} 幽^{カス}カニ坂^{サカ}ヲ跳^トブレ

途上^ニ娟人^ヲ仰^グ彼蒼^ヲ

途上^{トシヤウ}ノ娟人^{ケンジン} 彼蒼^{ヒサウ}ヲ仰^{アツ}グ

桜花は静に雪のように舞い落ちる 九段坂を上る

氣清かに 雀が嘯り 霞が薄く茫とたなびく

視える 兵卒の幽かな亡霊が跳び下つて来る

坂の途上 女人は蒼い空を仰ぎ見る